

## 槇文彦氏を悼む

私たちが新国立競技場改築のためのコンペで選ばれたザハ・ハディッド案の問題点を知ったのは、槇文彦氏の「新国立競技場案を神宮外苑の歴史的文脈で考える」(JIA マガジン 2013年8月号)でした。

自身も世界的な建築家でありながら、著名建築家も多く審査員を務めるこのコンペに異議を申し立てることには大きな勇気が必要だったと思われます。しかし槇氏のご自分がかつてこの風致地区と高さ制限のある神宮外苑で、都体育館を設計するときのたいへんな苦勞から、この高さ制限を軽々と無視し、狭い敷地に巨大な面積を持つ建築が建てられようとしていることにあえて異議を申し立てたのです。

これを読んで、私たちも何かしなくちゃ、とかねてより東京の建築や景観のために活動をしていた11人の女性が集まり、その年の10月28日、「神宮外苑と国立競技場を未来へわたす会」を結成しました。それからの数年というもの、槇先生や、同じ志を持つ建築家や研究者との協働の日々が続きました。また、IOC会長宛の手紙も、私たちを通じて出してくださいました。

運動のプロセスを通じて、私たちは槇さんに多くを学びました。市民の学校の生徒として、以下、槇文彦先生と呼ばせて下さい。

私たちの一つの願いは国立競技場を新たに建て替えるのではなく、1958年築の競技場を改修すること、新たに資材を浪費せず、ゴミもすくない改修は環境の時代の要請にマッチするものでした。一方、槇先生を中心に、ザハ案がいかに建築的に難しく、費用も膨大になるかの勉強会も行われました。その場での槇先生のウィットに富む会話を覚えています。「こんなつるつるの曲面のガラス窓、どうやって拭くんだろうね」「雪が降って積もったらどうするの?」また討論会では、ザハ案の大きさにクイーンエリザベス二世号を重ねた図でその高さや大きさを示し、「クイーン・エリザベス行っちゃうからいいけど、スタジアムはそこに残るからね」と言われました。またザハの目玉のキールアーチは断面が80平米もあり、「二本あればそこに2DKのマンションが180世帯は入れます」という説明も聴衆を沸かせました。

2015年夏、安倍首相は当初のザハ案を費用の面から断念し、再度のコンペが行われ、隈研吾氏を中心に大成建設が新国立競技場を完成。また新型コロナ流行により、2020年東京オリンピックは一年後に無観客で行われ、その後、新国立競技場は、あまり使われない国家のお荷物になっています。

あるとき先生は「日本文化には奥ゆかしい、奥さま、表と奥といった文化がある。ザハ案は狭い敷地に巨大建造物が建つので全く奥行きがない。一方、神宮外苑の二重の銀杏並木は、並木の奥に聖徳記念絵画館が見えることで奥が成立している」と発言されました。「神宮外苑の歴史的文脈」を尊重しようという、槇先生の最初の呼びかけは今も力を持っています。

運動の終熄により、槇先生とお会いする機会も少なくなっていました。槇先生は私たちの父母の世代にあたり、いつかはお別れの時が来ると思っていました。今回、訃報に接し、多くを教わった槇先生に、心からの追悼の意を捧げます。長いことありがとう御座いました。

2024年6月

神宮外苑と国立競技場を未来へ手わたす会・共同代表一同